学位論文要旨

幼稚園教育実践の「会集」に関する史的研究

―明治期開設仏教系幼稚園の史料を中心に―

広島大学大学院教育学研究科
教育人間科学専攻

D151418　三吉愛子

序章　問題の所在と研究の目的

現代の日本の幼稚園で毎朝行われているお集まり(朝の会)は，幼稚園生活に於ける一日の活動の始まりとして，幼児にとって重要な役割を担う時間である。その起源である「会集」が，歴史的背景によりどのように変容を遂げ，如何なる内容であったのか，それを解き明かすことが本研究の目的である。

海外（英語文献）における「お集まり（朝の会）」の研究については，専門能力開発における朝礼の時間の活用(Borns & Bradleytein,2007)や，社会的・感情的スキルと認知的スキル獲得の包括的な就学前カリキュラムを作成する為の，朝のミーティング時間利用（Cage,Charlene K.,2010）など，小学校就学前にある幼児教育で「朝の会・朝礼」の時間は教育的に意義ある重要な時間として認識されている。その時間は，「Morning Meeting や Morning Circle また広い意味での Circle Time 」として，幼児期や児童期の教育現場での意義を認める研究が進められている。朝の集会での多くの活動は，朝のメッセージや視覚的なスケジュール，カレンダーの時間など，特別なニーズを持つ子どもたちにとっても有益である。Borer，M（2017）は，朝のミーティングとその構成要素の価値を強調し，テクノロジーを取り入れることが幼い子供たちの学習を促すだけでなく将来への準備にもなることから，テクノロジー統合についても提唱している。また，自信を育む「朝の会」の目標を生徒たちに提供することを目的として朝礼で社会科のカリキュラムにつなげるアクティビティ（Carson & Cofie ,2017）や，「朝の会」を徹底的に検討しプログラムを開発し完成させている（Beckley,2000）マニュアルとして教員が利用できる書籍なども多く存在している現状である。日本の研究については，大野（2010,2012）は，家庭から園生活になじむために「朝の会」がルーティン化されそのことによってスクリプトが形成され園生活が成り立っていくことにつながることを検討し，保木井（2020）は，幼稚園の集まり場面における子どもと保育者の相互行為の在りようを示している。しかしながら，「お集まり（朝の会）」の意義や方法などを明記している文献はなく研究も多いとはいえない。現在の保育現場での実践については，各園の方針や宗派による方法で行われており，前日の遊びの連続性の観点から実施していない園もあるなど，その内容も様々である。そこで本研究では，現代の日本の幼稚園で毎朝行われているお集まり(朝の会)に着目し，その起源である「会集」が，我が国の幼稚園の始まりである東京女子師範学校附属幼稚園中心に，歴史的背景によりどのように変容を遂げ，如何なる内容であったのか，地方の史料も取り上げて解き明かしていく。史料については，岡田正章の他には日本の幼稚園教育史の研究者に未だ言及されていない山口県の幼稚園保育日誌を分析対象として，保育実践レベルで解明する。

我が国では，欧米のフレーベル主義幼稚園をモデルとした幼稚園教育の導入により，フリードリヒ・フレーベル(Friedlich Fröbel，1782-1852)によるキンダーガルテン創設から 36 年後の 1876(明治 9)年 11 月，東京女子師範学校に附属幼稚園が創設されたことで本格的に幼稚園教育が始まった。その後，数々の幼稚園の歴史研究やフレーベル主義幼稚園

の研究が行われてきた。幼児教育史研究における現在の課題の一部として，湯川(2007)は，地方の幼稚園教育史に関する史料・資料の発掘の必要性を述べている。明治前期においては比較的研究が進んでいるにもかかわらず，東京女子師範学校以外についての幼稚園の実態解明は十分に進んでいないことや，大正期以降の史料に基づく幼児教育の展開過程をその時代の社会状況と関わらせて実証的に検討する必要があると指摘している。また，宍戸(1988)は，史料の発掘，収集，整理という基本的な作業が低調であることや，史料が入手しやすい思想史，制度史，施史などに重きがおかれ，具体的な保育内容や保育方法・カリキュラムなど現場の保育実践に踏み込んだ歴史的研究が少ないことを課題として挙げている。田中（1998）は，幼児教育の歴史的研究について公的な文書以外の日誌など幼児教育史料の発掘と収集の困難さを指摘し，小山(2012)は，幼稚園に焦点をあてた歴史的研究において地方幼稚園間の関係性の存在について十分に検討がなされてこなかったと指摘するとともに，宍戸，湯川らと同様，実践者レベルでの保育思想の実態に迫る研究の重要性を説いた。さらに，金子(2013)は，東京女子師範学校附属幼稚園関係者以外の比較軸的に用いられた対抗的な理論や，歴史の中で立ち消えていった地方の保育方法論などにも光を当て，それらの展開・収束の経緯・過程を精査していく必要があると考察している。このように，「会集」の起源の解明においても，幼稚園における保育案からの分析として，保姆の手記や研究ノートなどの探索と収集を通じ，保育実践変容の背後と絡めて明らかにしていくことが求められる。

以上を踏まえて，「会集」における起源の解明について，先行研究の課題として次のものがあげられよう。（1）地方の幼稚園教育史に関する史料・資料の発掘による実態解明は必要であるが日誌などの史料発掘と収集が困難である点，（2）地方の幼稚園における保育日誌などの史料に基づく幼児教育の展開過程や幼稚園の背景の検討が進んでいない点，である。この課題意識より，幼稚園教育史研究で触れられていない幼稚園教育の実践内容の歴史のなかにおいて「会集」について，地方の幼稚園における一次史料から解読し検討を行う必要があるといえる。

本論文の構成は以下の通りである。現代の日本の幼稚園で毎朝行われている「お集まり(朝の会)」の起源であると考えられる「会集」が，歴史的背景により保育内容の変遷とともにどのような変容を遂げてきたのか，我が国の幼稚園の始まりである東京女子師範学校附属幼稚園で行われていた「会集」を中心に，「会集」の歴史的変遷について資料と一部史料から分析する（第 1.2 章）。次に，発掘した一次史料の山口県における仏教系幼稚園について，歴史的背景と人物との参照・交流関係を明らかにする（第 3 章）。その上で，保育日誌の史料を解読し，フレーベル主義幼稚園と比較しながら仏教系幼稚園の保育内容の特徴を述べ，幼稚園教育実践の内容で特に「会集」の内容と歴史的変遷について仏教系幼稚園の実態と特色を明らかにする（第 4.5 章）。最後に，以上の研究を総合し，東京女子師範学校附属幼稚園関係者との繋がりや，歴史の中で取り上げられていなかった地方に

おける保育実践について精査し，「会集」に着目することの意義を本研究の成果として提示する（終章）。

第１章　幼稚園教育実践における「会集」への焦点化

フレーベル主義幼稚園の研究については，唱歌遊戯内容を中心とした時間割や規則内容の検討(福原 1992a，福原 1992b)，見習い方式による保姆養成方法の検討(田中 2003a)，園舎の建築史的検討(永井 2005)，出席の促進方法の検討(福原 2007)，保育時間割にみる保育内容の検討(山岸 2010)，子ども中心主義の萌芽的実践の検討(西小路 2011)，恩物の具体的利用方法の検討(小川 2012)などの史料に富んだ大阪市愛珠幼稚園の保育内容に踏み込んだ史料分析研究などは多くみられる。しかし，現代の日本の幼稚園で保育内容としては位置づけられていない毎朝行われている活動の「お集まり（朝の会）」の歴史について着目した研究は海外（英語文献）の論文をレビューしても見当たらない。

「東京女子高等師範学校六十年史」によると，明治期の「会集」の始まりは，遊戯室に集まり唱歌を行なっていたことが理解できる。このことから，明治期最初の「会集」の意義は，幼児と保育者が一堂に会して顔を合わせながら，楽しむ機会を設け一日の始まりを共に喜び合うことにあると考えられる。その後，保育内容の歴史的変遷により時代の潮流と共に，「会集」の位置付けはどのように変容していったのであろうか。東京女子師範学校附属幼稚園の開設とともに日本の幼稚園教育史は始まり，現代の幼稚園で行われている教育実践内容へと変遷を遂げていく。明治期に幼稚園教育実践の中で重要視されていた「会集」が，その後の保育内容の歴史的変遷とともにどのような変容を遂げていくのか，その詳細について次章から論述する。

第２章　我が国の幼稚園における「会集」の歴史

第２章では，東京女子師範学校附属幼稚園を我が国における「会集」の始まりとして，その歴史を踏まえた上で，日本の幼稚園教育史における「会集」の歴史的変遷を論考する。現代全国の幼稚園をはじめとする保育の場で行われているお集まり（朝の会）は，明治期開設の日本で最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園を起源として，その時代の変遷とともに幼稚園規則の改訂を繰り返しながら，全国の幼稚園に浸透し変容をとげてきた。1899（明治 32）年の「幼稚園保育及設備規程」で「会集」は，保育内容の項目の中に入れられなかった。しかし，それ以降も現場において「会集」は重視され「会集」のために遊戯室の重要性も考えられた。その園の教育理念を幼児たちに伝えるのに適切であるとして，昭和になってからも「会集」を推奨するものが多かったことは注目に価する。「会集」は，小学校と類似した性格をもちながらも，子どもと保育者の毎日の生活の繰り返しの中で，幼稚園独自の文化としての位置づけが確立されていったと理解できる。

全国的な「会集」の時間については，1876(明治 9)年の開設当初の東京女子師範学校附属幼稚園の保育課程による保育時間表では，毎日最初に 30 分の室内会集の時間が設けら

れている 。1877(明治 10)年になると，7 月に幼稚園規則が制定され，保育課程の科目の他，時間表も定められ，以後の幼稚園に大きな影響を与えたといえる。さらに，1884(明治 17)年になると，これまで保育課程の保育科目を改正し，「会集」についても「1. 会集ハ毎日先ツ諸組ノ幼児ヲ遊嬉室ニ集メ唱歌ヲ復習セシメ且時々行儀ニ就テ訓悔ヲ加フルモノトス」と定められた。わが国初の官立幼稚園として設立されたこの園は中央にある模範的な幼稚園として，永続し日本全国に多くの影響を与えた。また，この保育内容や保育方法は，東京女子師範学校の卒業生や附属幼稚園関係者，あるいはこの園に実習に来た人たちを通して，直接・間接的に全国に広まっていったことが推測される。また，明治期開設の後続幼稚園における「会集」の時間は，大阪府立模範幼稚園 ・鹿児島女子師範学校附属幼稚園・愛珠幼稚園・若松幼稚園 については，東京女子師範学校附属幼稚園に倣って設定しているが，「会集」の時間を縮小し 20 分としている。また，「幼稚園保育及設備規程」が制定される直前の 1898(明治 31)年頃の豊浦幼稚園の日課表では，さらに時間が短縮され 15 分となってきている。1889(明治 22)年の愛珠幼稚園の幼稚園規則の中の第二章保育規程の第 7 条には，「会集」については，主に全体への談話・唱歌・遊戯等を楽しませることと記載されているにとどまり，具体的内容については明記されていない。さらに，キリスト教系幼稚園の「会集」は，1900(明治 33)年の明星幼稚園保育課程の中で，「会集」の内容として，「敬礼・唱歌・修身・談話」と記載され，「開誘日記」及び「園則(案)」第八章の保育要旨によると，「第一　会集，諸組ノ幼児ヲ一室ニ集メ唱歌談話等ニヨリ協同一致親愛ノ性情ヲ育テ且時々容儀等ニツイテ訓誨ヲ与フルモノトス」と記されている。

大正期になると，大正自由教育との関係の中，倉橋惣三らによる形式主義的な規律の批判により，「会集」という文言は次第に消えていった。1926(大正 15)年に公布された「幼稚園令」では，保育内容が「遊戯，唱歌，談話，観察，手技　等」とされ，従来の 4 項目に「観察」が加えられ，「等」の付加により，幼稚園では 5 項目に限定されずに保育内容を考えることができるようになり，「礼拝」や「朝礼」も含まれることになった。そして，本来「会集」の中に位置づけられていた「礼拝」や「朝礼」も継続されていく園もあり，1 日の始まりとしての重要な役割をもつ現代の幼稚園・保育園に息づく「朝の会」へ変容をとげていることが示唆される。さらに，その後，昭和の時代になり，まだ「会集」を行っていた幼稚園も見られたが，太平洋戦争を境に「会集」という言葉による現在の「朝の会」は，確実に変容を遂げたと考えられる。戦後，1945(昭和 20)年に連合軍総司令部は「日本教育制度の管理」に関する指令を出し，軍国主義的イデオロギーの普及禁止により，小学校の修身科の授業は完全に廃止されたことは幼稚園教育にも影響があり，軍国主義的内容は削除された。禁止された行動の中に，保育中の一斉行動として「朝礼」「会集」の文言も含まれていることが，「戦争終了から 2 年 4 か月間の幼稚園の状況調査」によりわかる。このことにより，「会集」という文言は，確実に保育の現場から消えていったことがわかる。その後も，保育内容については，連合国最高司令官総司令部の民間情報

教育局係官であったヘファナンの指導のもとで 1948(昭和 23)年に「保育要領」が作成された。その「保育要領」全ての内容の中には「会集」という文言は，一切使われていなかった。また，幼稚園の保育内容について，その基準の編纂のために倉橋惣三を中心とした幼児教育内容調査委員会を設置し，ヘファナン女史から「朝の礼拝がぬけている」との指摘もあったが，倉橋らにより指導書に書くことは無理との意見が通り，「会集」の内容と関連した点はないまま原案として提出された。

このような時代の流れの中，「会集」という文言は消えていったが，幼児にとって長時間緊張をさせる内容については，その具体的な内容を検討しながらも，幼児と保育者が一堂に会して顔を合わせながら，楽しむ機会を継続させていくことの必要性については名前を変えた形で存続していったのではないだろうか。この「会集」の時間としての価値が，現在の保育現場でも行われている「朝の会」の継続の意義と考える。

第３章　山口県における明治期開設幼稚園の史料に着目して

第 3 章では，山口県における明治期開設の華浦(現鞠生)幼稚園（以下，華浦幼稚園と記載する）の史料による分析を行うために，まずその史料を保存されていた山口県の幼稚園の歴史について我が国の幼稚園のはじまりとの関係を紐解いていく。

1876(明治 9)年，我が国最初の正式な幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園が開園され，その後各地の幼稚園は，東京女子師範学校附属幼稚園の影響を強くうけて設立されていくこととなる。日本に創設されたキリスト教主義幼稚園については，明治期に米国人宣教師によって 1886(明治 19)年金沢に開設された英和幼稚園(現在の北陸学院短期大学附属第一幼稚園)に始まった。1889(明治 22)年には神戸に頌栄幼稚園を創設し，その後キリスト教主義幼稚園は次第に増し，1896(明治 29)年には 15 園が米国人宣教師により開設されていった。その流れにより，山口県においても，山口市に 1895(明治 28)年，北米長老教会宣教師コルテス女子によって明星幼稚園が設立された。 このように，我が国のキリスト教主義幼稚園の発展の経緯については自明のことであるが，山口県に存在する日本最古の仏教系幼稚園のはじまりについては，岡田(1979)の『幼児保育小事典』の中で，明治期の仏教保育として幼稚園では「華浦幼稚園（山口・明治 25 年），共愛幼稚園(兵庫・明治 30 年)，常葉幼稚園(京都・明治 34 年)，足利幼稚園(明治 34 年)が知られている」と記載されているのみで，その詳細は明らかにされていない。また，1979（昭和 54)年文部省刊行の『幼稚園教育百年史年表』の中においても，明治期の山口県の幼稚園設立についての記載は全くなく，山口県は日本の幕末から明治維新の歴史的背景やその私塾等の関連からも教育熱心な県であることが明確であるにもかかわらず，その時代の幼稚園教育実践内容に言及した研究は管見の限りない。先に述べた本研究の目的としての端緒を開くためにも，明治期における山口県の幼稚園教育史を概観した上で，日本最古の仏教系幼稚園として設立された華浦幼稚園に焦点をあて，地方の史料をもとに歴史的背景を探るとともに様々な人物との「中央」の繋がりからその嚆矢を解明していく。山口県の幼稚園について

は，1979（昭和 54)年文部省刊行の『幼稚園教育百年史年表』の中には，明治期の山口県の幼稚園設立についての記載は全くなく，岡田(1979)による『幼児保育小事典』の仏教保育の中での「華浦幼稚園(山口・明治 25 年)」の記載と，湯川（2007）の保育課程に対する規制として 1893（明治 26）の 3 幼稚園(岩国幼稚園・華浦幼稚園・豊浦幼稚園)における保育課程の疑義とその訂正について記載である。また，研究ノートとして，西本・国広（2011）による山口県における幼稚園・保育所の拡充についての研究はあるが，主に量的な歴史的変遷の言及が存在するのみである。このようなことから鑑みて，山口県地方における幼稚園教育に関する研究は十分言及されているとはいえない。中央と山口県地方との繋がりを解明し，明治政府の近代化政策のなかで，欧米の進んだ文化導入の一環として海外から取り入れられた「中央」いわゆる東京女子師範学校附属幼稚園設立に関係した人々との影響と繋がりを解明する必要性を見出した。

そこで，華浦幼稚園設立には明治期における山口県（長州藩）の歴史的背景や幕末期や明治維新から輩出された多くの人材および浄土真宗を通じた歴史的関係者の参照・交流関係が影響を与えていることが解明された。特に，松野磡と松野クララや関信三，島地黙雷や楫取素彦と華浦幼稚園園長香川黙識との関係性について論述している。

第４章　仏教系幼稚園の史料による教育実践内容と「会集」

わが国における幼稚園は，明治期後期の創立の原動力となった系譜を見ると，公立系統宗教に関係のない私立系統，キリスト教系統，保育所系統，仏教系統，その他の系統（寺子屋から変遷したものなど）に分かれている。中でも私立幼稚園は，設立母体によって一般保育と宗教保育を行っている園があり，宗教保育を大別すると多くはキリスト教保育と仏教保育，その他神道保育などに分けられている。キリスト教系幼稚園の設立については，1880（明治 13）年に桜井女学校附属幼稚園が開設され，我が国におけるキリスト教主義の幼稚園の基礎を築いたことに始まり，その歴史や教育内容についても明らかである。しかし，仏教系幼稚園の教育内容の起源については現在までも十分に明らかにされているとはいえない。現代における仏教系幼稚園の様に，その一日が合掌礼拝に始まり，生活の中に宗教的儀礼など仏教精神を基にして宗教情操教育を取り入れた保育活動が行われていたことが推測されるが，実際にどのような実践がなされていたのか，また教育実践内容はどのようなものであったのか追究する。我が国の仏教系幼稚園の起源を持つと言われる華浦幼稚園では，フレーベル思想に基づく東京女子師範学校附属幼稚園における教育内容の類型と同様な保育が展開されながらも，必ず仏教的な色彩の濃い「会集」を園の生活のはじまりに置いていた。東京女子師範学校附属幼稚園やそれを範とする他の幼稚園では「会集」の時間の中に，「唱歌」や「お遊戯」を行うことが多かった。1891（明治 24）年には，幼児への負担や儀式化への反発から，「会集」の時間も短くなり，また大正期になると「会集」自体も行われないようになっていった（三吉 2018）。しかし，華浦幼稚園では，はじめは教訓色の強い仏教の内容についての「訓話」が「会集」で行われはしたもの

の，時代の変遷とともに，幼児の生活への気づきや諸注意，仏教の説話にとらわれない内容に変容していった。また，一日のスケジュール「会集」の位置付けは大きく，保育者による多くの記載がされており，仏教系幼稚園の時間の中で重要視されていることが明らかである。「会集」中の園児の様子や教師と園児のやりとりについてもいきいきと描写されていた。また「会集」の取り組みだけではなく，教育実践内容においても，明治期に一般化したフレーベル主義幼稚園の内容が継続され，「恩物」による保育も行われていたり，また小学校令施行規則に則り「遊嬉」「唱歌」「手技」「談話」の実践も垣間見られた。さらには当時，流行していた土川五郎の律動遊戯や，「手技」作品を持ち帰らせる「お土産」といった先進的な試みも実施されていた。これらのことは，仏教的な教義を中心とした保育を展開している仏教系幼稚園というこれまでの画一的なイメージを塗り替えるものであると考えられる。併せて華浦幼稚園ではフレーベル主義幼稚園として設立された東京女子師範学校附属幼稚園の保育内容も取り入れつつ，また時代の潮流にも敏感に反応しながら，仏教（浄土真宗）を基盤とした独自の教育実践を進めていることが特徴として明示された。

第５章　仏教系幼稚園の「会集」に関する史料解析

本章では，第４章の仏教系華浦幼稚園の保育日誌から明らかになった「会集」について特に熱心に記載されていた 1922(大正 11)年度 一ノ組の保育日誌を主たる分析対象とし，その具体的内容と宗教性(宗教的実践)を解明した。その際，宗教性を以下の真鍋(2013)の定義に依拠して，特に，宗教的実践について論考した。宗教性とは，人間や宗教団体がもつ宗教的な性質のことであるが，真鍋 (2013)は「宗教性の定義は研究者の数だけ存在する」とし，宗教的信念(religious belief)， 宗教的実践(religious practice)，宗教的知識(religious knowledge) ，宗教的経験(religious experience)，道徳という領域での宗教的行動の結果 (moral consequence of religious behavior) など宗教性の定義として５つの次元(Glock and Stark 1965)をあげている。分析方法としては，上記の 5 項目の宗教性の中でも，ここでは，保育活動の「会集」の中で，「礼拝」など宗教的実践に関わる次元を宗教性と位置づけ，日誌の文言から関連用語を全て抽出した。その上で，Microsoft Excel を使用して１年間 244 日分の全ての日誌「会集」部分の文言を入力し，年間，学期，月毎に数値化し実践活 動内容の種別にカテゴリー化した。その際，上位カテゴリーと下位カテゴリーについて命名し，その内容と頻度から華浦幼稚園の「会集」の特性を考察した。その結果，大正 11 年度の日誌の中で見られる月毎の宗教性(宗教実践)の用語を明らか にすることで，カテゴリー化された用語頻度(延数)から「礼拝」に通ずる関連用語としての「静なり・静寂・合掌・礼儀・作法」また，「説法」への関連する用語として「訓す・法話・訓戒・心得・善悪・愛・ 死・命・戒め・」仏教行事「命日・報恩講」や宗教による祖師との直接的関連用語として 「仏様・お釈迦様・聖徳太子・親鸞聖人・神・御仏神」などを導き出し，宗教性(宗教的実践)の特色を明らか

にすることができた。また，保育日誌の丁寧な読み解きにより保育者と子どもの会話や保育者の子どもに向ける宗教的信念も示唆された。今回の大正期保育日誌の史料解析により，我が国最古の仏教系私立幼稚園として華浦幼稚園を引き継いだ鞠生幼稚園は，大正期には宗教教育を基底とした「会集」が顕著に見られる保育活動であったことが明らかとなった。特に，浄土真宗の開祖である親鸞聖人は日本に仏教を広めた聖徳太子を観音菩薩の生まれ変わりとしてその功績を大いに讃えたことからも，現代の幼稚園・保育園に祀られている聖徳太子像との繋がりが明らかとなった。このような，仏教系（浄土真宗)幼稚園の宗教性(宗教的実践)から，現代に引き継がれている朝の会の起源としてのその変遷を窺える。特に，華浦幼稚園の場合は，「会集」と宗教行事の関連性も大きく，先述した大正11年度の日誌記録からも，宗教儀礼を中心とした徳育上の教育効果を重んじた「会集」の時間を重要視していたことがわかる。大正後期以降，日本の幼児教育史では「会集」は消えていったように捉えられているが，それでも華浦幼稚園において継続していたのは，宗教的信念や徳育主義によるものも大きいであろう。その変遷についても仏教系幼稚園の特色が影響しているといえる。デイリープログラムの中で行われる宗教儀礼については，時代とともに形式主義として否定されて，行事の中で行われる宗教儀礼とは内容を異にした方向性へ移行していったのではないかとも考えられる。

終章　総合考察

以上の研究を総合し，全員が揃い再会を喜び合う共感的な会合の場としての機能を目的とした，現代の日本の幼稚園に繋がる毎朝行われている「お集まり（朝の会)」の起源である「会集」の目的の変遷について考察した。湯川(2019)は，保育日誌の分析によりその時代の保育を実践レベルで掴むことができるようになると述べている。また，金子(2013)は，保育手記の分析から保育実践変容の背後にあると思われる問題意識を探ることの可能性を提起している。その手法を援用して，「会集」の変容過程を分析することによって，日本の創成期における幼稚園教育の姿を保育実践レベルで論考し，本研究の成果として得られた知見を以下に示す。

第一に，現在，我が国の幼稚園をはじめとする保育の場で行われている朝の会（お集まり）は，明治期の東京女子師範学校附属幼稚園の「会集」を起源として，時代の変遷とともに幼稚園規則の改訂を繰り返しながら，全国の幼稚園に浸透し歴史的背景により変容をとげてきた。その方法や内容もそれぞれの園毎に変化していき，「会集」は，小学校と類似した性格をもちながらも，子どもと保育者の毎日の生活の繰り返しの中で，幼稚園独自の文化としての位置づけが確立されていったと理解できる。

第二に，明治期開設の仏教系華浦幼稚園の教育実践内容は，フレーベル思想に基づく東京女子師範学校附属幼稚園における教育内容の類型と同様な保育が展開されながらも，「会集」を重視した強制とは異なる礼拝や仏教的人格陶冶の実践を通した徳育的教育効果を持っていたことが示唆された。

第三に，仏教系華浦幼稚園の日誌の具体的な「会集」は，断片的ではあるが宗教的文言が多く見受けられ，宗教行事の関連性も大きく，宗教儀礼を中心とした徳育上の教育効果を重んじた「会集」の時間を重要視していたことがわかる。大正後期以降，日本の幼児教育史では「会集」は消えていったように捉えられているが，それでも華浦幼稚園において継続していたのは，宗教的な信念や徳育主義によるものも大きいことが保育実践レベルで明らかとなった。

本研究では，我が国の幼稚園の始まりである東京女子師範学校附属幼稚園で行われていた「会集」を起源として，史料の解析を中心に保育内容の歴史的変遷とともに変容してきた「会集」の実相を明らかにしてきた。明治前期の「会集」の意義である「幼児と保育者が一堂に会して顔を合わせながら，楽しむ機会を設け一日の始まりを共に喜び合うこと」から歴史的背景により変容を遂げ，時代の潮流と共に，その方法や内容もそれぞれの園毎に変化していき，最初の意義とは違う方向へと変容していることが理解できる。子どもにとっての「会集」は，楽しく喜びを共有する時間よりも，保育者主導の強制的な訓誡を行うのに適した時間となっていく。大正時代に入ると，多くの幼児を一か所に集めて画一的に行うものについては，幼児を長時間緊張させ疲労を与えるとして，倉橋惣三等の進歩的な考え方の幼稚園から非難も生じた。一方，従来通り「会集」が保育にとって大切であると説く保守的な考え方も少なくなく，「会集」の賛成者も幼児に緊張させず疲労を避けるように注意していると反論しており，そこに論争が行われている。幼稚園令を制定するための1925（大正14）年の調査結果によると，「会集」を行っている幼稚園はわずかに1.6%に過ぎなかったことが報告されている。しかし，大正新教育の中心的課題は，「子ども理解，子どもの心理の理解」であり，倉橋惣三が最も意を用いたのは，子どもが安心して自発性を発揮し，能動的な経験の中で知的にも感情的にも力をつけ，幼児なりの自己コントロールを身につけてゆくことだったと思われる。その点から「会集」は子どもの自発的な活動を制約し，言葉による教誨や規律によって子どもに窮屈で形式的な行動を強制しかねないこともあり，それは自主的人格を育てる上でマイナスとなるような考え方をしたのではないかと推察する。また，その指摘を受け取らずに，「会集」を続けた幼稚園が多くあったことは，「会集」の教育的意義を認めたのか，ただ習慣的にそうしただけなのかも，史料の裏付けによる実証はないため確定できないが，倉橋惣三の目指す近代的で自主的な人格が日本ではまだ理解されなかっただけなのかもしれない。強制力や権威による教育は，子どもの中に内発的なモラルが育たず，強制しなければコントロールを失うことが戦後改革で議論されたことであろう。また，その後，昭和の時代になり，まだ「会集」を行っていた幼稚園も見られたが，太平洋戦争を境に「会集」という言葉は変化していく。小学校においても，第二次世界大戦前には「学校全体の統一精神の涵養」に朝会の主眼がおかれ，特に戦時下には合同体操や校長訓話などが厳しく実施された。戦後，1945年(昭和20)連合軍総司令部の「日本教育制度の管理」に関する指令により，小学校の修身科の授業が完全に廃止された時期，幼稚園教育においても「会集」という文言は消えてい

く。そして，「会集」という名前はなくなりながらも，現代の日本の幼稚園・保育園で行われている全体集会やお集まり（クラス単位での朝の会・モーニングサークル等）に通ずる活動として，変容を遂げ儀式として存続したと考える。また，そのような「会集」の歴史において，仏教系華浦幼稚園の保育日誌に記載された「会集」の内容から，宗教儀礼を中心とした徳育上の教育効果を重んじた「会集」の時間を重要視していたことがわかる。大正後期以降，日本の幼児教育史では「会集」は消えていったように捉えられているが，それでも仏教系華浦幼稚園において継続していたのは，宗教的な信念や徳育主義によるものも大きいことが保育実践レベルで明らかとなった。

以上のように，本研究では，我が国の幼稚園の教育実践内容「会集」の歴史的変遷と地方の仏教系幼稚園における大正期の「会集」の具体的内容が明らかとなり，明治期より続いてきた日本の幼稚園の歴史の一端が「会集」に現れていることが示唆された。その際，主に大正期以降の一次史料（保育日誌）から幼稚園の教育実践内容「会集」の展開や意義を描くことに焦点化しており，明治期から大正期にかけて連続した保育日誌という記録を対象として検討することはできなかった。そのため，今回の史料による知見は，仏教系幼稚園における「会集」の一事例でしかないことからも，厳密には仏教系幼稚園の教育実践内容を詳細に描ききることはできなかった。今後はその間隙を埋める史料を発掘し，明治期から大正期にかけての幼稚園教育内容の「会集」の全体像に迫ることが課題である。しかしながら，そこには宍戸（1988）や田中（1998）が指摘したように，新出史料入手の困難さが立ちはだかるという限界がある。今後は可能な限りその課題に取り組みつつも，日本の現状を踏まえた上で，「会集」から変遷した現代の日本の幼稚園の「文化」としての教育実践内容に，応用可能な知見を導くための更なる検討が求められる。

【史料】

・鞠生幼稚園所蔵　1911（明治 44）年度の保育案，1914（大正 3）年度保育日誌，1921（大正 10）年度二ノ組保育日誌，1922（大正 11）年度一ノ組・三ノ組保育日誌，1943（昭和 18）年度の保育日誌，および大正 3 年度製作帳（毎月の作品），明治 41 年度以降卒園児名簿，明治 41 年度会計簿，昭和 15 年度個性調査表等

・明星幼稚園　書籍・Photo Album・唱歌集やその他ファイルなど 26 点である。明治 28 年～32 年 7 月 11 日までの Photo Album，明星幼稚園記録，創立百年史作成のための資料ファイル他

【主要参考文献】

Allen-Hughes, L., 2013 “The Social Benefits of the Morning Meeting: Creating a Space for Social and Character Education in the Classroom”. Dominican University of California Master's Theses.

浅井幸子,2008,「明治末における保育記録の成立過程保育者の語りにおける実践の意味に着目して」『幼児教育史研究』３,17-32.

東基吉，1900,『フレーベル氏教育論』育成會.

東基吉，1904,『幼稚園保育法』目黒書店.

Borer, M.,2017, “Integrating Technology into Morning Meeting in Early Childhood”. Northwestern College Master's Theses.

Barbara A.Wasik·Annemarie H.Hindman,2011,The Morning Message in Early Childhood Classrooms: Guidelines for Best Practices,Early Childhood Educ J (2011) 39:183-189.

榎本常·平松三木枝，1887，『幼稚保育の手引き』細謹舎.

福原昌恵,1992a,「草創期幼稚園における唱歌遊戯(2) 愛珠幼稚園における保育を中心に」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』33(2)2,99-111.

福原昌恵,1992b,「1897 年の愛珠幼稚園における保育内容 唱歌遊戯を中心として」『新潟大学教育学部 人文・社会科学編』34(1)1,33-46.

福原昌恵,2007,「明治期大阪愛珠幼稚園における保育への幼児出席の把握促進のための方策とその意義」『保育学研究』45(2),96-106.

Hume,K.,2006,“Making the most of morning meeting”.The Reporter,11(3),10-14.

Hindman,A., 2011,“The Morning Message in Early Childhood Classrooms: Guidelines for Best Practices”.Early Childhood Education Journal,39,183-189.

Hindman, A., 2012, “Morning Message Time: An Exploratory Student in Head Start”. Early Childhood Education Journal, 40(5),275-283.
橋川喜美代,2003,『保育形態論の変遷』春風社.
フレーベル會編,1979,「會集の研究」『婦人と子ども』17(1),12-20.

保木井啓史,2020,「幼稚園の集まり場面における子どもと保育者の相互行為の研究―アプロプリエーションの観点から―」『子ども社会研究』26,25-46.
上笙一郎･山崎朋子,1994,『日本の幼稚園』筑摩書房.
金子嘉秀,2013,「明治後期の幼稚園におけるフレーベル主義をめぐる保育実践の変容に関する研究―京阪神および広島女学校付属幼稚園を中心として―」広島大学大学院教育学研究科 2013年度博士論文.
加藤周一編,1998,『世界大百科事典』第 18 巻.平凡社.
国吉栄,2005,『日本幼稚園史序説　関信三と近代日本の黎明』新読書社.
国吉栄,2011,『幼稚園誕生の物語「諜者」関信三とその時代』平凡社.
国吉栄,2000～2002,「幼稚園誕生の時代　関信三の葛藤(1～12)」『幼児の教育』.
倉橋惣三,2017,『保育人間学セレクション　6 児童文化・宗教教育』,学術出版会.
倉橋惣三･新庄よし子,1934,『日本幼稚園史』東洋図害.
小針誠,2005,「戦前期における幼稚園の普及と就園率に関する基礎的研究―幼稚園の普及をめぐる地域間格差に注目して―」『乳幼児教育学研究』14,79-89.
小山みずえ,2012,『近代日本幼稚園教育実践史の研究』学術出版社.
小山みずえ,2009,「大正・昭和初期の幼稚園における遊戯研究の展開 大阪市立幼稚園を中心に」『上智大学教育学論集』44,85-98.
三吉愛子, 2022,「幼稚園教育実践内容の「会集」に関する研究　―仏教系幼稚園の大正11年度の保育日誌を中心に―」『保育文化研究』14,49-58.
三吉愛子, 2022,「幼稚園教育実践内容の「会集」に関する研究　―仏教系幼稚園の大正11年度の保育日誌を中心に―」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」』3,10-18.
文部省,1979,『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社.
長江侑紀･鈴木康弘･若林陽子･森田怜･戸髙南帆･彦坂春森･福元真由美, 2019,「近現代日本の保育史研究の動 向と課題 ： 2007 年～2017 年 の研究を中心に」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』70(1),73-89.
永井理恵子,2005,『近代日本幼稚園建築史研究 教育実践を支えた園舎と地域』学文社.
永井理恵子,2008,「明治後期竣工の幼稚園舎二棟の建築と教育に見る地域力：愛珠幼稚園(大阪市)と旭東幼稚園(岡山市)」『キリスト教と諸学：論集』23,113-122.
名須川知子,2005,『唱歌 遊戯 作品における身体表現の変遷』風間書房.
中村五六,1893,『幼稚園摘葉』普及舎.

中村五六,1906,『保育法』國民教育社.
中村五六･和田實, 1908, 『幼児教育法』東京堂.
西小路勝子,2011,「子どもに寄り添う保育実践の黎明-大阪市立愛珠幼稚園の保育記録(明治28～40年)からの論考-」『保育学研究』49(1),6-17.
日本保育学会,2010,『日本幼児保育研究　第1.2.3巻』日本図書センター.
小笠原道雄,1994,『フレーベルとその時代』玉川大学出版部.
小笠原道雄,2021,『原典資料の解読によるフリードリヒ・フレーベルの研究 国際化の視点からみるフレーベルの思想・制度・実践に関する考察』福村出版.
岡田正章,1979,『幼児保育小辞典』日本らいぶらり.
岡田正章,1963,「明治初期の幼稚園論についての研究（1）」『人文学報』31,69-90.
お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園,1976,『年表 幼稚園百年史』国土社.
大野和夫,2012,「入園からクラス替えに至る幼稚園児の様子:保育者の視点から見たクラスに「なじむ」ことと子どもの発達」『松本短期大学紀要』19,3-14.
大野和夫・寺島明子,2012,「年少児クラスにおける「朝の会」の進行過程」『鎌倉女子大学紀要』19,1-12.
太田素子･浅井幸子,2012,『保育と家庭教育の誕生』藤原書店.
太田素子･湯川嘉津美,2021,『幼児教育史研究の新地平〈上巻〉-近世・近代の子育てと幼児教育-』
宍戸健夫,1998,『日本の幼児保育　昭和保育思想史』上巻, 青木書店.
瀧川光治,2006,『日本における幼児期の科学教育史・絵本史研究』風間書房.
田中まさ子,1998,『幼児教育方法史研究-保育者と子どもの共生的生活に基づく方法論の探究-』風間書房.
湯川嘉津美,2019,「保育日誌にみる大正期の幼稚園教育の実際」『日本保育学会第72回大会要旨集』K-13～K-14.
湯川嘉津美,2015,「教育史研究の意義と課題」『教育史学会第58回大会記録』116-120.
湯川嘉津美,2008, 「フレーベル会の結成と初期の活動-演説, 保育方法研究と幼稚園制度の調査･建議の検討 から-」『上智大学教育学論集』42,21-43.
湯川嘉津美,2007,「日本幼児教育史の研究の到達点と課題」（シンポジウム記録）『幼児教育史研究』第1号.pp.1-36.
湯川嘉津美,2002,「小西信八の幼稚園認識」『日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要　人間教育の探究』15,75-90.
湯川嘉津美,2001,『日本幼稚園成立史の研究』風間書房.
湯川嘉津美,1988,「明治初期におけるフレーベル理解　フレーベル伝の訳述をめぐって」『日本保育学会大会研究論文集』41,650-651.
湯川嘉津美,1994,「明治初期地方における幼稚園受容の性格-大阪市府立模範幼稚園の事例を中心に-」『香川大学教育学部研究報告』1(88),163-187.